



小艇での戦力充実 待たれるエイトでの成果

創部百周年までに全日本選手権の奪回を目指す、長期的計画として取り入れている小艇練習だが、今年のインカレではや花開き好成績を収めることができた。彼らの勢いと予選で敗退した対校居残り組が来年に期す執念の相乗効果が新生同志社の原動力となるだろう。

手負の対校

今年の対校クルーは、朝日レガッタ以降故障者が続出し、最後までメンバーの固定を見ないという半ば間に合せ状態で、レースに臨まざるを得なかった。秋の陸トレの量の不足により、最終的な目標であったはずのインカレ直前には、全てのツケがまわってきたかの様な惨めな状況に陥った。わずかな希望は、一回生一人、二回生二人を加えたクルーが、辛うじて決勝進出を果たした朝日、関選などで粗削りながら若さ故の力強いオールを引いていたことだ。我々は雰囲気呑まれず、全力を出しければ活路もひらけるというおもいで強豪ひしめく予選に臨んだ。

【予選】

今大会参加クルーの中でも、我々が予選で対戦した日大の艇速は、東大、中央と並んで群を抜いていた。そこで予選を流し敗復に勝負をかけて何とか準決勝に進出しようという消極策も作戦に浮かんだが、クルーリーダーの意志は、予選さえ全力を出し切れないクルーが敗復に賭けたところで到底勝ち上がるものではないとの考えで、当然予選から全力をぶつける方向に固まっていた。

スタート前のアップでは、なんとか本来の調子を取戻したかに見えた我々であったが、やはり日大、慶応にはスタートで完全に置き去られてしまった。中盤では北大とキャンパス差の競り合を続け、東大も追い込んだものの結局五位と遅れをとり、敗復にまわることになった。

【敗者復活戦】

準決勝は一位のみとあって、予選並みの厳しいレース展開が予想された。勝ち上がるためには今季二敗を喫している滋大に負ける訳にはゆかない。1000mを過ぎた時点で、トップ争いは滋大、同大、阪大に絞られた。どうあっても関西のクルー同志で負けたくないという気持がクルーにはあった。しかしそれは、結局動きの固さとなってあらわれてしまう。おりからの逆風で、足けりでの艇速も思うように伸びない。焦りがつのるばかりだ。そして終始喰らいついてはいたが、ゴールで滋大に水をあげられ敗退し、準決勝進出を断たれたのであった。

クルーのひとこと

三番 杉山

今年の対校は、朝日以降のメンバーの入れ替え、そして、故障の続出によって、思うように漕ぎ込みが出来ず、練習不足だったのが成績の不振になったと思う。僕自身も、レース前には、「いったい2000m漕げるのだろうか」と弱気になり、全く自信がなく、距離に対する不安が最後まであったと思う……。今後は、ボート馬鹿になって、体力、精神力、技術を、どんどん向上させ、練習量ならどこにも負けないと堂々と胸を張って言えるほど練習し、自信をもって漕ぎ、好成績が残せるように精進したいと思う。

六番 佐藤

絶対勝つという自信。そんなものは私には無かったような気がする。私にボートを漕ぐことを要請したものは、おそらく勝つだろうという疑心と、多分負けるだろうという不安だった。自信というものが私にボートを漕ぐことを要請することはなかった。つまり私は試合をする前に己に敗けていたのであり、エイトの一員としては失格であったと思う。漕いでも、漕いでも、疑心、不安がつきまとうから、これからも漕ぎまわろうと思う。



実力の第3位

—山下・岡田組—
ダブルスカル

全日本選手権 3位
全日本大学選手権 3位

8月25日、インカレダブルスカル予選である。私達はこのレースの為に6月からクルーを組んで目指してきたのであった。私達は2人も高校時代からスカルをやっていたので監督に無理に頼みこんでのシングル、ダブルスカルのレース出場であったため、2人も絶対に勝たねばならないと決意し練習に取り組んだ。

25日予選、1レーン早稲田、3レーン広島大学、4レーン東北大学だ。我々はメンバー的にも見て絶対勝てると思い安心しきっていた。しかし結果的にはそんなに甘くなかった。伏兵早稲田に0.3秒差で負けてしまった。そして敗復、予選で負けたせいも2人もかなり精神的に落込んでいたが気をひきしめレースに臨んだ。他艇に水を明け一位にてゴール。26日、いよいよインカレ準決だ。金沢大学、早稲田大学、一橋大学、東海大学だ。予想では東海、早稲田、同志社の争いになると思った。しかも早稲田には前日の予選で負けている。しかし結果は逆風のアウトレーン有利のせいも我々と東海がスタートから抜け出し2位でなんと通過することができた。28日決勝である。この日の為に今まで練習してきたのである。東海、日体大、東北、同志社である。3位まで全日決勝進出である。スタート、我々は好ダッシュで飛び出し500m 2位で通過、やはり日体大、東海、同志社の争いであった。しかし1500mで東海に抜かれ3位でゴール、またしても前年同様東海に負けた。28日全日決勝、インカレのメンバーの他にトヨタ、早稲田との5クルーとのレースである。僕達はこのレースで大学でのスカルのレースは最後と思い臨んだ。スタート、またも好ダッシュで抜けだした。以外にもマークしていたトヨタは伸びず後退していた。1500m日体大、早稲田、東海が一直線我々は東海を抜き3位であった。とても感激した。この感激もひとえに監督、マネージャーのおかげだと思ひ感謝いたします。



努力の第3位

—三上 和彦—
シングルスカル

全日本大学
スカル選手権 3位

朝日レガッタ終了後、大半の二回生がエイトに乗り込む中で、私は自分の希望実現と自分の適性を考えて、スカルを続けさせてもらうことにした。だが一ヶ月後の関選においては、艇の整備不良から不本意な結果となってしまったので、インカレと併催されるスカル選手権こそ何としても良い結果を出そうと、夏休みのスカル練習に取り組んだ。なすべきことはなしたが、なにぶん2000mのレースの経験がなく、ペース配分等の見当がつかないことが不安だった。レース一週間まえからの戸田練習でも過密状態のボンドで十分な練習ができず、実戦感覚については手探りの状態で予選に臨むことになった。

予選、もともとスタートダッシュを重要視していなかったのだが、予想以上にスタートで遅れてしまい、300mぐらいまでは三番手に甘んじていた。しかしその後我慢を重ね自分のペースで漕ぎ続けてゆくと、500mを過ぎたあたりでリズムにのることができ、先行艇を次々抜き去り、1000m地点ではもう勝利を確信できるぐらい差をつけることができた。予選は楽に通過できた。

準決勝。予選の結果から、レース戦略をたてて、後半に勝負することに決める。予想通り1000mまでは二番手、しかしその後、ミドルスパートをかけトップに踊り出し、そのまま逃げ勝った。このレースは予想通りの展開で、大会中一番納得のいった会心のレースだった。

決勝。とにかく最後のレースであり、ある程度ハイペースでスタートした。さすがに決勝ともなると、後半に急に落ちる者もなく、大変苦しいレースとなった。順位は四番手で艇差はなかなかつまらなかつた。しかし、1000m過ぎ、三番手の藤本（広島大）がブイにひっかけたのが見えたので、ミドルスパートをかけ一気に抜いて三位でゴールした。

優勝した高田（東北大）とのタイム差は七秒あったが、初めてボートで入賞を果たすことができた。この先スカルを続けるかどうかは解らないが、とにかくインカレ優勝を目指し練習してゆきたい。



＝艇友会だより＝

同志社漕艇創設百周年記念事業について

同志社創立、113周年に新島記念講堂が完成し、標記の百周年が目前に迫って参りました。つきましては皆様にアンケートを求めましたところ、別記のように意義ある貴重なご提案を頂き深く感謝して居ります。先ず記念事業の何如にかかわらず、現在の漕艇部の大学レベルでの実績の向上、現状打破を期待されていることを改めて痛感致しました。具体的な仕事として次の様な構成を提案したいと思います。

実行委員会（準備委員会）

- (イ) 記念誌編集委員会（仮称同志社ローイング百年）
- (ロ) 企画委員会（記念誌広告他）
- (ハ) 記念式典委員会
- (ニ) 基金募金委員会（海外派遣準備基金他）
- (ホ) 同志社高校漕艇部設立（指導者育成）委員会
- (ヘ) ボートハウス充実（艇庫増築・トレーニング施設）委員会

昭和64年2月11日に於いて発足を願って居ります。

何卒諸先輩の自発的な御参加と全面的なご協力をお願い申し上げます。

新井監督の辞任と後任者の推薦について

艇友会幹事長 石本 君夫

本年8月末、全日本選手権終了後永年御苦勞をかけている新井監督より辞意の表明がありました。これからという時であり、何とかと要請しましたが、仕事上のこともあり余り彼ばかりに無理を言うのも限りあることであり、岡本部長の許可を得、そののち更に後任の推薦の依頼されました。高橋会長に相談させて頂きました所、私に一任することと秋の練習方針もあり、あまりプランクを開けてはならないと判断して早速選考し、昭和47年卒の横山基嗣君を監督候補として、部長、会長、幹事長の内諾を得つつある次第であります。更にコーチとして横山君は昭和52年卒山口忠博、昭和61年卒中村俊裕両君をスタッフに求め了承を得ております。

本来総会の総意により推薦されるべきものですが、来年に向けての大切なシーズンオフの練習も本格化しており、私の考えで監督、コーチを各々スタートしてもらっております。昭和64年2月に開催予定の総会に於いて推薦を決定して頂き、強力にバックアップしたく存じますので御協力の程お願いします。この件について御異議御意見のある方は幹事長まで御一報下さいませようお願いします。

新井君の熱心な指導と御苦勞に心より御礼申し上げます。

艇友会費並びに寄付金の納入について

瀬田に厳しい冬が訪れてきました。早いもので今年もあとわずかとなりました。現役はアルバイトしながら合宿しております。新しい指導者のもと来年の一層の飛躍を期待したいものです。

さて、今年も艇友会費並びに寄付金の納入有難く御礼申し上げます（別記）納入方法の変更で納入実績が芳しくありません。学年代表はじめ沢山の方に御協力を頂いておりますが目標にほど遠い現状です。未納の方は至急振り込んで頂きますように願います。

（第一勧業銀行大津支店 普通預金1013818 同志社艇友会）一年会費15,000円—

なおマネージャーが挨拶に廻っておりますのでし未納の方で預けて頂ければ幸いです。行違いで納入の方は御容赦下さい。

艇友会費・寄付金の納入者名簿

昭和63年11月30日現在
167名 計2,917,000円

昭和3年	愛敬元成	昭和33年	北龍村久弥	昭和42年	赤尾正明	昭和56年	石田雄治
昭和4年	西邨省三	昭和34年	龍岡田和憲	昭和43年	高橋富孝	昭和56年	中内久雅
昭和4年	太田博	昭和34年	岡田貴隆	昭和43年	富江花繼	昭和56年	中内片雅
昭和12年	大乾宮正	昭和35年	内和由康	昭和43年	富江花繼	昭和57年	目河森保
昭和13年	乾橋正	昭和35年	岩崎添	昭和43年	川上本	昭和57年	河森保
昭和14年	高平弘	昭和35年	山本	昭和43年	川上本	昭和57年	河森保
昭和16年	平井年一	昭和35年	山本	昭和44年	山本	昭和57年	河森保
昭和16年	吉井年一	昭和35年	山本	昭和44年	山本	昭和57年	河森保
昭和16年	増子一	昭和35年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和16年	渡辺一	昭和35年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和17年	太田豊	昭和36年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和17年	榎坂次	昭和36年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和17年	田中羊	昭和37年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和18年	柏原博	昭和37年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和24年	土肥信一	昭和37年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和24年	高山正	昭和38年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和25年	山田善	昭和38年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和25年	森島昭	昭和38年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和25年	山堀井	昭和38年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和26年	堀井要	昭和38年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和28年	寺元卓	昭和38年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和28年	國富雄	昭和39年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和28年	西堀幹	昭和39年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和28年	村山一	昭和39年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和28年	赤井實	昭和39年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和29年	勝山伸	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和29年	小野木	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和30年	湯川長	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和30年	園英明	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和30年	赤塚弘	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和31年	加畑哲	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和31年	岩波春	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和31年	小野博	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和32年	脇方良	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和32年	脇方良	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和32年	脇方良	昭和40年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和33年	浅井青	昭和41年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和33年	南昌吾	昭和41年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和33年	内田順	昭和41年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和33年	畑山純	昭和42年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和33年	加藤智	昭和42年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保
昭和33年	伊藤美	昭和42年	山本	昭和45年	山本	昭和57年	河森保

拝啓

厳寒の候、先輩方におかれましては益々御健勝にて御活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、新春初漕ぎ会を催す時季となりました。御多忙とは存じますが、万障繰り合わせの上、御参加下さいます様、宜しく御願ひ申し上げます。

日時 昭和64年1月2日(月) 午前10時30分スタート

(当日は、9時30分頃までに合宿所にお集まりください。尚、会終了後合宿所に於いて、豚汁等のサービスを予定しております。)

敬具

昭和63年12月

同志社大学ボート部

同封しております力漕第9号に追加、訂正がありましたので、御報告申し上げます。

P. 4 追加	昭和19年	松井一雄	昭和37年	中田康夫
	昭和23年	西川秋弥	昭和38年	入江豊
	昭和25年	四方久男	昭和50年	梅田雅昌
	昭和26年	清水裕	昭和54年	村田一郎
	昭和26年	本間満秋	昭和54年	木村俊雄
	昭和33年	矢野功	昭和62年	高橋良明

P. 4 訂正 昭和63年 (誤) 河江克彦
(正) 阿江克彦

P. 6 訂正 副将 西田利彦 (誤) 経済学部
(正) 法学部

元気なジュニア

来年に期待たかまる

我々ジュニアメンバーのほとんどにとって戸田は初めての2000m初めての大きな挑戦であった。

以前から戸田の水は重いと聞いていた。少しの流れもなく、どんよりと鉛色に淀んでいる。漕いでも漕いでも艇は漕いだ分だけしか進まない。いやでも目に入る関東のクルーの漕ぎを見ていると、自分達との実力の差を見せつけられる思いがした。そんな不安と焦りのうちに試合は始まった。

予選は、法政、慶応 WHITEOAK、神戸、同志社、慶応理工、東大天龍の6クルーである。準決勝へは1位しか上がれない。半ば観念し胸を借りるつもりで試合に臨んだ。

スタート直後いきなり6レーンの東大の姿が視界から消えた。緊張と焦りが入り混じる。どうしてもピッチが上がってゆくと艇速はその他のクルーとほぼ互角のようだ。しかし体がかたくなっているせいか異常にしんどい。やっと500mを過ぎたあたりでようやく本来のリズムを取り戻した。ここからが勝負である。1000mあたりから、慶応理工、法政、神戸を引き離していった。慶応 WHITEOAK ともいい勝負だ。ところが我々はラスト500mになって最後のスパートが効かずに、結局は更にピッチをあげた慶応にちょっとの差ではあったが追い抜かれ、やむなく3位に終わってしまった。ただ船台に帰った我々のそれぞれは、東大とは話にならなかったものの慶応程度ならといった次の試合につながる何らかの得たことを確かだった。

敗復は翌日27日に行なわれた。神戸、東京経済、同志社、慶応 HANDSOMELAKE、法政の5クルーである。今回は昨日対戦したクルーが2クルーもあり、準決勝へ進めることを確信していた。しかしいざ試合に臨みスタートしてみると、我々がマークしていなかった慶応に一步リードされてしまった。慶応は予選では6位で、しかもかなり遅いタイムだったので全く意外な展開となった。慶応はそれからハイペースを保ち、なかなかその差は縮まらず、ラスト500mまできてしまった。ここで一気にさしたいところだが、ピッチがあがらずとりあえず2位で準決勝へ駒を進めることになってしまった。

準決勝は約3時間後に行なわれた。同志社、東海、東北の3クルーである。一日に2回もの試合は苦しいが、もうここまで来たからは当たって砕ける覚悟でスタート位置についた。いよいよ最後のレースになるかもしれない。この気持が未熟なクルー内で力みにかわり、我々はフライングをとられてしまった。あせりは禁物である。そして再度スタートの旗が振られた。スタート直後から大方の予想通り東北がリードを奪い、その後ろを同志社と東海が競り合いながらつけていた。なんとか1500mまではそのままついて行った。ここで何とかしたいと思っているうちに、東北は腹を切り、我々は一気に半艇身にまでその差を縮めた。しかし追撃もここまでで、立て直した東北をさしきれず、結局3位のままゴールしてしまった。

今回の試合ではやはり最後の500mの詰めの甘さが命とりとなった。これは体力不足によるものが大きい。2000mという距離での、技術力だけではカバーしきれない根本的な基礎体力が足りなかった。その辺の強化が来年度のまず第一の課題となろう。

88年度試合結果報告

関西選手権大会

対校エイト4位
ダブルスカル優勝
シングルスカル
三上 } 準決勝進出
喜多 } 予選敗退
津島 }
瀬田川杯レガッタ
Jrエイト優勝

全日本大学選手権

対校エイト予選敗退
ダブルスカル3位
オックスフォード楯レガッタ
Jrエイト 準決勝進出
全日本学生スカル選手権
シングルスカル
三上 3位
喜多 } 準決勝進出
小原 } 予選敗退
津島 }
吉田(武)



ローイングテクニックの基本について

前監督 新井 喜範

これからボートを始めようとしている人にとってローイング技術の基本を理解し計画的にトレーニングすることが上達の早道であることは言うまでもない。そこで技術面での基本について特に新人向けとして簡単に述べてみたい。ボートの基本は何かと問われて強く大きく漕ぐことだと言う人がいるがこれは間違っているし大まかな表現で初心者には誤解を与えやすい。まず基本をマスターしなければ強く漕ぐことも大きく漕ぐこともできないということを知るべきであり、さらにどういう風に強く漕ぐのかなぜ大きく漕ぐ方がいいのかを理解しなければならない。どういう漕ぎ方をしても艇は加速減速をくり返して進むのであり等速で進むことは不可能である。従って加速段階ではいかに効率よく加速させるか又減速段階ではできるだけ減速を押さえることがローイング技術の基本となる。以下基本を3段階に分けて述べるが、その順序に従ってトレーニングすべきである。

【第一段階】 ローイング技術の第一の基本は艇を効率よく加速させることでありその為にはストロークの始めからフィニッシュにかけて徐々に強く漕ぐことである。いわゆるハード・ハーダー・ハードストの要領でオールを引ききらなければならない。ストロークの前半を爆発的に漕いでもミドル・フィニッシュにかけてそれより以上に強く引くことができなければ艇の効率的な加速は生まれない。トレーニングの順序としては腕漕ぎ上体漕ぎ1/3スライド漕ぎ1/2スライド漕ぎと徐々にレンジを伸ばしていくやり方がベストである。初心者なら最初の一年間は腕漕ぎ上体漕ぎをたっぷりやる方がいい。しかも軽く漕ぐことから始めなければならない。ノーフェザーでクリーンにフィニッシュができるようにしなければ少し強く漕いでみるという具合に順序としては、レンジを短くから徐々に長く、漕ぎの強度を軽くからだんだん強くするのが基本である。

【第二段階】 第二の基本は十分リラックスした状態でフォワード動作を行なうことである。艇はフォワード時に最も加速する(フィニッシュ時ではない)のであるからこの時、艇の推進を妨げるような余分な力を艇に与えてはいけない。つまりバランスを崩したり上下動を与えるような動作をすべきでなく、その為にはハンズアウェイ・リカバリーをスムーズに行ない十分リラックスしてフォワード動作に入らなければならない。リズム感が良いとか、艇速に乗って漕ぐとかの表現はこのフォワード動作がスムーズに行なわれ艇が十分に加速している状態を指している。

【第三段階】 フォワードの後半からキャッチにかけて艇は減速し続けキャッチ直後に最も減速する。第三の基本はキャッチでの減速をできるだけ少くしすみやかに艇を加速段階に転じさせることである。正確にブレードインし間髪を入れず水を押し艇を加速させることが必要で技術修得の上で最もむづかしい部分であり短期間での上達は望めない。キャッチでのブレードの戻り、空けり、たたき込み、大きなスブラッシュ等が悪い例で、まず自分でいちばん楽にキャッチできる位置から始めて少しずつキャッチ角を広げていけるようにすべきだろう。

以上の基礎技術を習得する上でシングルスカルの乗艇練習が最も効率的である。そこでは艇自体が諸君の有能なコーチ役を果たしてくれ、諸君の欠点を百パーセント指摘してくれる。初心者はまず一人でボートに乗り軽くスムーズに艇を走らすことから始めるべきである。間違っても初心者同志でエイトに乗り組んではならない。それは出口のない迷路に入り込むようなものである。

【最後に】 五年間の監督生活を終えた今、勝てなかった無念さと大過なく次にバトンタッチできる安堵感や今だに冷めきれないボートへの熱い思いやらが入り混じった複雑な心境の時を過ごしている。ボートへの興味が増すよう諸君達に刺激を与え続けたつもりだが果たしてどうだったのだろうか。熱中し興奮し結局いちばん楽しんだのは私だったような気がしないでもない。ともあれ私の血湧き肉踊る五年間は終わった。後任のスタッフは私以上に熱く燃えてやってくれるだろう。諸君スポーツは熱くなってやらなきゃ意味がない。

新幹部紹介

主将	坂本 龍一	商学部
主務	朝倉 伸二	経済学部
副将	西田 利彦	経済学部
会計	配川 隆司	法学部

新主将あいさつ

このたび、監督、コーチ陣、そして現役幹部の全てが変わりました。そして来春、対校エイトの艇とオールが変わります。同大ボート部の現状を打開する為の、最高の条件が揃いました。ようやく長いトンネルから抜け出すキッカケが生まれたのです。だからこそ今年はず勝

たなければなりません。でないとも、暗闇の中に入ることになるからです。“なぜ勝てないのか!?”ということは、毎年代が換る度に考えてきたことです。しかし現実に勝てなかったということは、やはり何か欠けていたのだと思います。それが何であるのかをつきとめる事は、我々勝利を知らない世代にとって容易なことではないでしょう。それでもとにかく、なぜ走ったり漕いだりしているのかということから始まり、なぜ練習しているのか、なぜ合宿をしているのかという全ての事に答えを出すために、あくまで“勝つこと”にこだわり続けてゆきます。そして強い同志社の伝統を再び築きあげた年代に必ずなってみせます。